
オオカミとヒツジ

結城尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オオカミとヒツジ

【Nコード】

N5252S

【作者名】

結城尚

【あらすじ】

180cm後半のガタイのよい身体、目つきの悪い風貌のせいである「一匹オオカミ」と呼ばれ周りから恐れられている瀬川。如月も彼のことを苦手だと感じていたが、ある日彼と二人きりになった時、とんでもないことをしてかしてしまい…。不器用な二人のさわやかラブコメを目指しました。

オオカミとヒツジ その1 (前書き)

少々修正した部分があります。

オオカミとヒツジ その1

聖人君子のように心の広い人は別として、人なら誰しも、苦手な人というのは存在するものだと思う。

それはまだ、入学式も終わってまだ日も浅く、新入生として初々しさが抜けきらなかった頃。

お昼休み、できたばかりの友達・キヨちゃんに付き合って、私は学食にいた。

あまり広いとはいえない学食の中、すでに席でたむろしている先輩達が怖くてびくびくとしている私と一緒に、今はすっかり先輩だと笑顔一つで蹴散らしてしまうキヨちゃんもさすがにあの頃は緊張していたっけ。

トレイを持ったままうろとあたりを見渡す私たちをよそに、ひととき目立つ男子学生がいた。

明らかに新一年生が着るであろう真新しい学ランを豪快に着崩し（とはいってもボタンをはずし、シャツをだけさせている程度だったのだが、まじめで有名なこの進学校ではいかんせん目立った）先輩達がいち早く座るであろうはずの窓際の特等席の広いテーブルを、一人独占し優雅に昼食をとっているその人。

当時は彼がどんな人かもわからずに、ただその威圧的な雰囲気ですっかり飲み込まれてしまった私は、“迫力のある人だなあ”とその時はぼんやりと思っていただけだった。のだが。

「一匹オオカミ」

身長180？後半、強面のその人瀬川優斗は、いつのまにかこう

呼ばれていた。

いつも眉にしわが刻まれていて、無表情でその上目つきも悪く、睨まれると一目散に逃げたくなるほどの迫力。

ガラが悪いことで悪名高い隣街の男子高に殴りこみに行ったதாக、ヤクザにからまれて逆に殴り倒したとか、そのテの噂は絶えない。

一行以上会話してるのを見たことがない。笑った顔を見たことがない。

まさに、孤高のオオカミ。

気がついたときには、みんな遠巻きに彼を見るようになっていた。

かくゆう私も、その中の一人。はじめはぼんやりと“迫力のある人だなあ”と思っていたその人は、平穩を好む私にとって、噂が広がるにつれて“できればお近づきになりたくない人”へと昇格していた。

だがしかし、平穩はえてして突然崩れさるものだったのだ。

オオカミとヒツジ その2

「きさちゃん、お願い！」

ええと、そんなに拝まれても。

両手を顔の前でがっちり合わせ、そこいらの男子生徒がやられたらすぐにノックアウト、大きい目を涙でうるませながらとどめの上目づかい。

友人のキヨちゃんのここまであからさまな“究極のお願い”は数カ月に一度あるかないか。“お願い”は一週間に何度もされるけど。

あまりの勢いに思わず後ろに下がるが、そのまま逃がすものかとじりじりとせまってくる。美人さんがすごむと怖さも数倍だ。

「お願い。デートに遅刻しちゃうよー!!」

いつのまにか教室の隅に追いやられている。困った。逃げようにも逃げ場がない。

みんなは気の毒そうに私を見ているだけで、決して優しい手を差し伸べてくれることはない。なぜか。もちろん、巻き込まれたくないから…だろう。

こんなことなら、わざわざ8組まで寄らないでさっさと帰ればよかった。突然部活(ちなみに、料理部)が顧問の急用とかで休みになって、キヨちゃんと寄り道でもしようかと思って顔を出してみれば、これだ。

肝心のキヨちゃんは最近付き合い始めたばかりの大学生の彼とデ

ートで一緒に帰れないし、何やらやつかないことになった。

キヨちゃんが私に託したがっているのは、その手にしつかりと持った日誌。本来日直が書くべきものであるソレは、今なぜかクラスの違い私の手に渡ろうとしている。この8組の教室に数回しか足を運んだことがない外野の私に、だ。

別に日誌を書くぐらい、と思われるかもしれない。私だって、いつもならこれぐらいのお願いごと、二つ返事で引き受けていたと思う。(外野な私が書くのだから、当然中身は薄っぺらなものになってしまっただろうけど)

けれど、今日ばかりはいつもの“お願い”に負けてキヨちゃんの頼みを受けるわけにはいかない。

なぜなら、キヨちゃんの名前は世戸。つまり、キヨちゃんの日直の相棒は、例のあの人、瀬川君だから。

いよいよ鼻息荒く眼前に迫ったキヨちゃんを拒むように両手で顔をガードしたら、その大きな眼に恨みがましい色が浮かんだ。

「ごめん…他の人に頼んで」

「いいじゃない、別に日誌ぐらい。どうせ今日はもう部活休みなんですよ？暇でしょ？」

ばっさりと切られ、メールなんて送らなければよかったと後悔した。返信がなかったのは、返事を求めに私がほいほい教室に来ると踏んでのことだったのか、もしかして。

部活がないと暇だと決めつけられるのもちょっとショックだ。本当に、さっさと帰っておけばよかった。どうせ、デートする相手もないですよ、ええ。

「それにもう他の人残ってないしい」

あ。ほんとだ。きよると周りを見渡すと、キヨちゃんの背後の教室にはもう誰の姿もなかった。

みんな…逃げたのね。さっきまで遠巻きに見ているだけだったくせに、火の粉を振りかぶる気配を敏感に感じ取るやいなや、そろりと逃げ出したに違いない。

まずい。このままでは本当に日誌を書くはめになってしまう。放課後の教室で、あの瀬川君と二人きり。

少し想像してみる。張り詰めた空気の中、カリカリとシャープペンの音だけが響く教室。

キヨちゃんを通して、ちらりと瀬川君の様子を盗み見る。窓際が一番後ろ、特等席に座った瀬川君は、だるそうに窓から外を眺めている。全然こちらには興味がなさそう…というか私たちのやり取りさえ聞こえていないんじゃないかと思うぐらい、その空間だけ異質な雰囲気を放っていた。

「私がやると瀬川君に迷惑だよ！だって、部外者だし、8組の今日の授業のことだって何もわかんないんだよ？キヨちゃん」

必死になって拒否すると、キヨちゃんは教室の一番後ろ、窓際の特等席に座っている瀬川君に振り向き、あっさりとはそれはもう私が一瞬びつくりするぐらい、普通に声をかけた。

「ねえ瀬川、私この後用事あって日誌書けないんだけど、私の友達が書いてくれるから！ちなみに今日の授業とか書いたメモ置いておくから、後はてきとうにお願いしていい！？」

瀬川君に向かって「瀬川」呼ばわりだなんて…。

ぎよっとする私をよそに、キヨちゃんは瀬川君に見えるように、ポケットから取り出した紙を握った右手を大きく向かって降る。メモするぐらいなら最初から日誌を書いておいてくれればいいのにと思ったが、言えなかった。

一連の騒ぎなどどこ吹く風、ぼんやりと窓から外の風景を見ていたらしい瀬川君は、こちらをちらりとも見ることなく、だるそうに口を動かす。

「…別に」

うわ。ほんとにどうでもよさそう…。

やっぱり私の存在にすら気がついていないんじゃないかと思うくらい。

ちょっとショックを受けている私を知ってか知らずか、キヨちゃんは私を安心させるように笑った。

「ほらね、大丈夫だって」

「でも…」

「きさちゃん」お願い！日誌なんてちよろちよろと書いてくれればいいから！これを逃したら二週間会えなくなっちゃうから、少しでも長く会いたいんだよねえ…。」

最近できたばかりのキヨちゃんの彼氏は大学生というだけあって、なかなか忙しい。そういえば今週から京都の学会に行くから、しばらく会えないと昨日言っていたのを思い出す。その前に少しでも時間が開いたから会おう、ということになったんだろうか…。

しょうがない。

結局は、いつだってキヨちゃんのお願いは断れないのだ。

どうせ日誌なんてすぐに書き終わる。8組の方々には悪いけど、できとくに書いたらすぐに帰らせて頂こう。そもそも、みんな逃げたのだから、文句を言われる筋合いはない、はずだ。

瀬川君のことは…正直怖いけど、大事なキヨちゃんのためだからちよつとだけ頑張ろう。

最後の一撃とばかりに少しうるんだ目でみあげられて、私はしづしづ日誌を受け取る。

この時、自分がとんでもないことをしでかすことになるとは思ってもいなかった。

オオカミとヒツジ その3

キヨちゃんが抜けた後の教室は、重苦しい沈黙に包まれている。沈黙に耐えかね、おそろおそろ瀬川君の隣の席に私が腰をかけたのはおよそ5分前。

座るやいなや、急くように走らせているシャープペンの音が教室に響いて、さらに私の緊張を高まらせた。たった5分前なのに、ものすごく長い時間が経ったように感じる。

…ああ、ものすつごく、気まずい。

左隣では、頬杖をついた瀬川君がじっとこちらを見ているのかわかる。ただし、視線はずっと下にむいたまま。日誌にそそがれているのだとは分かっていても、その鋭い視線はどうにも居心地が悪い。手の平や背中に、夏の暑さのせいではない、いやな汗が伝わるのかわかる。

落ち着け、落ち着くのよ私!!

心の中で念仏のように落ちつけ落ち着けと唱えながら、キヨちゃんからもらったメモを頼りに今日の授業内容を書き込んでいく。

数学、英語、化学：意外にもメモにはしっかりと内容まで書き添えられていて、ここまで書いたのならやはり直接日誌に書いておいてほしかったと一瞬恨みの念が起きそうになったが、体育のところでぴたりとペンが止まった。

「えーと。今日、男子は体育何やりました…？」
うわ。声裏返っちゃった。

しかも、緊張のあまり敬語が出てしまい、私は一人焦る。

10分間の沈黙を破りようやく出た言葉だったが、瀬川君の「陸上」の一言で会話らしい会話にもならず一瞬にして終わってしまった。それどころか、焦った私を怪訝に思ったのか、瀬川君の視線が私に移ってしまった。まずい。これじゃ逆効果だ。余計に気まずい。

え、なんでなんでなんで。そんなに私変な顔してる？！

焦る私の心を知ってか知らずか、瀬川君が視線の先を変えることはない。じつと、無言で、私を見てるのがわかる。

隣の席に座った自分を恨みそうになった。思ったよりも、距離が近い。

普段の教室で隣に座っている人との距離なんて気にもしないくせに、今この時はやたらと「隣の席」という距離感に動揺を禁じえなかった。

意識しまいとして日誌に集中しようとしても、どうにも左が気になっってしまうががない。

いまさらながら、日誌を引き受けてしまったことを後悔する。今まさにラブラブしているであろうキヨちゃんを一瞬本気で憎く思う。

強い視線を感じる中、逃げたいという衝動を必死でこらえながらペンを走らせる。

メモに、キヨちゃんのちよつとくせのある丸文字で大きく「生物：狼の生態」と書いてあり、思わずペンの動きを止める。瀬川君のあだ名が連想され、一人どきまぎとしてしまった。

「一匹狼」

何考えてるのかわからない。背がでかい。目つきが鋭い。怖い。怖い。などなど。そんなイメージ。

あの目で見られると、ものすごく緊張してしまう。怖い、とは少し違う。あえて言うなら、苦手。

去年、同じクラスだったときは、まだそんな事はなかった…のに、な。

瀬川君は、いつも外を見ていた気がする。そして、私は彼の背中しか見ていなかった。

オオカミとヒツジ その4

視線から逃れるように一心不乱に手を動かしたおかげか、ようやく日誌を書きおわって、ほっと一息つく。

教壇の左上に飾られてある時計を見て、書き始めてから15分ぐらいしか経っていなかったことに驚く。ものすごく長い時間に思えた。2時間ぐらいいに。

必死で書いている間、彼は一言も声をかけてこなかった。視線を感じていたためそちらを向けなかったということもあるが、必死な顔な形相で日誌に向かっていた私を彼はどう思っただろう。不審に思われなかったかと、今更ながら気になるが、もう遅い。

「あ、の。書き終わったから、確認……」
してもらえますか、という言葉は続かなかった。

かたりと椅子を動かし、恐る恐る立ちあがりながら左を向くと、彼は机にうつ伏せになっていた。無造作に机の上に載せられた左腕に顎を寄せ、顔をこちらに向けたまま、しっかりと瞳が閉じられている。椅子の音でも気付かないのだから、結構本格的な眠りに入っているのだろうか。

普段なら、人に日誌を任せておいて寝ているなんてと少し不機嫌になっていたかもしれない。けれどこの時ばかりは、その鋭い眼光がしっかりと閉じられたまぶたに隠れていることに、心底ほっとした。そもそも、日誌を一人占めし彼に口をはさむ余地すら与えなかったのは自分なのだし。

そのままこっそりと教室を出て、書き終わった日誌を職員室まで

届ければ任務は完了。ちょっとした緊張はありつつも今日という日は無事に終わるはず…だったのだが。

足が床に縫いつけられたかのように、一步もそこから動けない。なぜなら、あまりにもかわいい寝顔だったから。

瀬川君は、邪気のないすこやかな寝顔を惜しげもなくさらしている。短めに切りそろえられた前髪はその寝顔を隠すことはなく、よく見ればいつも引き締まった口元は少しだけ開いていて、それがまた無防備さを通り越して色気すら感じさせる。

思わずごくりとのどをならしてしまった自分に気づき、落ち着かなければとあわてて頭を左右に振って、無理やり正気を取り戻そうとするが、どくどくと心臓は激しい動きのままだ。

ああ、これは永久保存版にしくちゃ！なんてヨコシマな気持ちになり、すばやく右のポケットに入っていた携帯を取り出し、カメラをセットしたところで我に返る。

…さすがに、これはヤバイかな。

彼氏でない、ましてや友達どころか確かな知り合いでもない他人が携帯で寝顔を撮るなんて、盗撮者意外の何者でもない。

諦めて携帯を元のポケットに戻すが、瀬川君の寝顔から目は離せないままだ。気づかれないようにそっと息を詰め、中途半端に引いた椅子が音をたてないよう慎重に席から足を出し、そのまま一步步くへ。

心の中では、すみませんごめんなさいでもちょっとだけ、繰り返しながら、しばらくその寝顔を眺めていた。

たぶん、こんな寝顔めつたに見られないだろうなあ。いや、絶対、かな。

うーん…それにしても。

これじゃオオカミというより…ヒツジだよねえ？

ヒツジの耳をつけ、もこもこの毛皮に包まれた瀬川君を想像してしまい、思わず小さな笑い声が漏れてしまった。慌てて口を閉じるが、瀬川君は少し眉根を寄せただけで、また寝息をたてはじめた。

しばらく、そのままじつと寝顔を見つめる。

手が触れそうで、触れない距離。起きそうで起きない、瀬川君。自分の心臓がばくばくとすごい勢いで鳴っているのがわかる。

無防備な顔に、さらさらの前髪、少し半開きになった唇。

思い出す。去年、先生の気まぐれによって行われた席替えで、夏休みの直前、わずか二週間だけ私は彼の間後ろの席だった。

ちゃんと背筋の伸びた背中。授業中は少しだけ前かがみになって、右手が動きたびにシャツも少し揺れていた。時々つまらなそうに外を眺めていて、プリントをまわす時でさえ、その視線がこちらに向くことはなかった。

今なら。手をのばしたら、届いてしまうだろうか…

。

ガタッ。ガタタタッ

「……………」

机が揺れた音で、閉じられていた瞼がぴくりと動き、穏やかだった眉間にぐっとしわが寄る。

はっと我に返った私は、混乱しながらも慌てて鞆をひつつかみ、逃げるように教室を飛び出した。

いきおいあまって机と椅子を転がしてしまっただが、そんなことは気にしてられない。

真っ赤な顔をしながら転げるように玄関を出てきた私を、すれ違う人たちはあからさまに不審な目で見ていたが、今は気にならなかった。

……………！??私、いま、何した!?

混乱の極みの中、声にならない叫びを頭の中に響かせながら、どうか彼が気づいていませんようにとそれだけを祈りながら夢中で駅へと走った。

オオカミとヒツジ その5

頭が痛い。それは寝不足のせいばかりではない。

どんなに学校を休みたいたいと言っても、所詮高校生の戯言。母親つて恐ろしい。布団をひっぺがされて、制服を投げつけられ、気がついたときには無理矢理鞆と一緒に家の外へ放り出されていた。鬼だ。

今まではキヨちゃんとなかなか会えず不満に思っていた8組との距離が、今日は彼と出会わずに済むための最高のものに感じる。1組と8組は校舎が違い、さらに文系と理系で授業内容も全く違うことから、学食や図書館などの共通の建物を避けさえすれば、ほぼ校舎内で会うことはないはずだ。そうでなければ、本当に今日学校まで来ていたかは怪しい。もちろん、最寄駅や玄関など、鉢合わせの確立がある場所では警戒を怠らなかったが。

昨日から、家でも学校までの道のりも学校に着いてからも、頭をぐるぐるとまわっているのはたった一つのこと。

…なんであんな事しちゃったんだろう。

フラッシュバックする昨日の記憶。昨日、自分がしたこと。

授業中だということも忘れて頭を抱え込んだ回数は、一度や二度じゃない。

柔らかい感触がよみがえり、真っ赤になっているだろう顔を両手で覆う。

これじゃまるで、瀬川君がヒツジで、私がオオカミみたいだ。

悶々としているうちに、気がつくとも6時間目も終わりにさしかかっていた。昨日に引き続き、今日も部活が休みになったため、あとは気づかれないように家に帰るだけだ。

ばれていれば呼び出しを受けて問い詰められていただろうから、何事もなく今日を終えられたからには、彼はおそらく気づいていないのだろうと思う。

もし気が付かれていたら…。

万が一のことを考えると、ぞくりと背中に冷たい汗がつつたう。しばらくは8組に近づくまい。

キヨちゃんにも近づくまい。あの人に関わるとロクなことにならない気がする。よし！

「何百面相してるの、如月ちゃん」

隣の席の友人が呆れ顔をしていたが、そんな事にかまっている余裕はなかった。

長かった一日が終わり、いつどこで彼に呼び出されるか、鉢合わせするかと緊張し通しだった私はほとほと疲れ切っていた。友達へ挨拶を簡単にすませると、そそくさと玄関に向かう。

幸い、私のいる校舎のほうが玄関に近いので、ここまで来るともう会うことはないだろう。私たち3年生の階は2階だ。階段を駆け下りながら玄関をきよきよと見回すが、それらしき人物はいない。ようやくほっと肩の力を抜いて階段を下るが、そこでまさかの奇襲をかけられた。

「きさちゃん！」

呼び止められて、ギクリと体の動きが止まる。

そのまま止まっていようか、無視して走って逃げようか一瞬迷っているうちに、足のはやいキヨちゃんはしっかりと私に追いついていた。

あーあ……。あともう少しだったのになあ。玄関に向かっていた足は、一階の階段を下りたところで止まってしまった。

かなり拳動不審な行動になっている私をキヨちゃんはちっとも気にしていないようで、屈託のない笑みを顔に広げた。

「昨日ありがとねー！いやあ、助かつちゃった！瀬川君も助かつたって言ってたよ」

瀬川君、という単語にどきり、いやぎくりとする。イヤな汗が吹き出てきた。

「あの、瀬川君何か言ってたかった？」

「え？何かって？別に何も言ってたかったよ」

じゃあ、瀬川君は本当に気付いていなかったのかな。

…よかつたー！ー！ー！ー！ー！ー！

へらりと笑顔を浮かべ、心の中では思いつきり万歳。

ああよかった、神様ありがとうございます！もう二度と、寝ている人にあんな不埒な真似はしないでくださいね！

怒涛のように神への感謝の言葉が頭の中を駆け巡る。

安心からか、半泣きで思いつきりゆるんだ顔をしている私をキヨちゃんは不思議そうに見ていたが、しばらくして思いだしたようにさらりと私を奈落の底へ突き落してくれた。

「あ、ごめんごめん、その瀬川君から伝言頼まれてたの忘れてた。
昨日きさちゃんから借りたもの返したいから、後で8組に取りに来
てくれて。私が渡しておくよって言ったんだけど、直接返したい
からいいって。意外にまじめなんだねー、彼」

オオカミとヒツジ その6

逃げようか逃げまいか散々迷って、でもどうせ逃げたって同じ学校なんだから逃げきれぬわけがないし、昨日の今日で会いたくはなかったけれどどうせ私が播いた種なんだから潔く散ったほうがまし、という結論に至り、覚悟を決めてこのドアの前にいる。

「ごくりと生唾を飲み込み、震える足を無理やりしゃんとさせる。深呼吸して、いざ。」

無駄だとは知りつつ、音を立てないようにそうつとドアを開けて、8組の教室を静かに覗き込む。教室には人の気配が全くなくて、静まり返っていた。

「誰もいない？」

その事実にも、先程までの極限の緊張が一気に緩んだ。その瞬間。

「…遅い」

「わあ!?!」

いきなりの背後からの声に、文字どおり飛び上がってしまった。振り向くと、危惧していた通り。そこには、ぶすつとした無表情の瀬川君が立っていた。どこから出てきたんだろう。慌てて教室の中に入り彼との距離を取ろうとはわかるが、彼は無表情のまま教室のドアを後ろ手で絞めてしまい、むしろ退路を断ってしまったことが悔やまれる。飛んで火にいるなんとやら、だ。

彼の眉間にはくつきりとしたしわ。目つきはいつも以上にすると

く感じられ、唇もしつかりと閉じられている。瞬時に昨日自分がやった事が脳裏に蘇って、自然と顔が火照った。

「ええと…遅くなってごめんなさい！ななな、何か用？」

はたして昨日の例のアレを気づいているのか気づいていないのか、必死になって彼の表情を探ろうとしたが、一匹オオカミの表情が読み取れるはずもなく。

こちらの意図を知ってか知らずか、彼は無表情のまま右手に持っていた日誌をぱらぱらとめくり始めた。

「…」

「へ」

ずいっと日誌を突き出されて、覗き込む。瀬川君が指さしているのは、私が昨日書いた部分。昨日の授業の内容と日直の感想。

「読めねえ」

「……………」

淡々と言われると、ますます恥ずかしいんですけど。確かに彼がごついと思いきや意外に綺麗な手で示している箇所は、うにようによと曲がりくねった私の文字で書かれていて、ものすごくわかりにくい。

「というか、読めない。」

恐らく、緊張しすぎて手が震えたんだろう。恥ずかしくて顔だけじゃなく、体じゅうが火照ってきた。

「…えーと、ごめん、なさい。書き直し、ます。」

恐る恐る日誌を受け取り、一番近かった机の椅子を引いて、ゆっくりと座った。

すると、当然のように彼が前の席の椅子を引いた。

震えを隠すように足に力を込めるけど、全然言うなりになってくれない自分の体がかしい。右手も足同様、彼が近くにいると思うだけで震えが止まらない。

前の席だなんて、隣の席よりも太刀が悪い。椅子の背もたれに両腕を寄せ、その上に顎を寄せた彼との距離は昨日よりもずっと近い。…そして、去年のあの頃よりも。

「先帰ってていい、よ？」

「元はといえば俺の仕事」

間髪入れず言われてしまった。そう言われてしまったら、無理に帰らせるわけにもいかない。

早く書いて、一刻も早くこの心臓に悪い状態から抜け出したい。必死になって日誌に向かうが、焦れば焦るほど字は乱れる。昨日よりも近い距離からの強い視線が、今日はどうしても違う意味を込めたものだと思ってしまう。

…逃げたい。

もう自分の顔は半泣きになっているだろう。どうしても、彼に意識がむいてしまう。

「昨日」

突然、彼がボソリとつぶやいた。驚いた拍子に、シャープペンがぼろりと手の中からこぼれ落ちた。

私がそうするよりも早くしゃがんだ彼が、椅子の下に落ちたペンを器用に拾って、私に差し出す。

「なんのことやらって…昨日、俺のココに、キスしてた」

そう言って、また一段と顔を近づけて来る。

それこそ、手どころか唇だって届きそうなぐらい、近くに。

生まれてからこのかた、とんと異性との縁に恵まれない私にとっ
ては、刺激が強すぎる。

…も、だめ。限界…!!

「ま…魔がさしたかな…なんて」

あああ何言っただろう自分。まるで若い子に手を出した親父が
奥さんに問い詰められて白状しているみたいな、間抜けな声が出た。

ほとんど考えることのできてない頭で、精一杯とりつくろう。に
へら、と力のない笑い。顔やら手やら、体じゅうが熱い。もう、ほ
んと、て、手を離してほしい。それしか考えてなかった。

「…へー。あんた、魔がさしたら誰にでもすんの。変態？」

「ち、ちがいます！だって、だって…あの、せがわ、君…かわいか
つたから」

本音がぼろりと出てしまった。かわいい、の言葉で彼の顔が、無
表情から少しゆがむのを見て、本格的に身の危険を感じる。

「かわいい…だと？」

「ごめんなさいごめんなさい！だって、本当にそう思っちゃったか
ら…なんかこう、触りたくなるっていうか、ぎゅーっとしたくなる
っていうか、だから、つい…」

あれ？なんだか私、本当に変態ちつくな事を言っていない？

だが言ってしまったものはもう遅い。眉間に刻まれたしわが深くなり、彼を包むオーラが怒りの様子に変わっていくような気がして、恐ろしくなった私はぎゅっと目を閉じて思い切り防御態勢をとる。

うつむき、ひたすらにごめんなさいごめんなさいと呟く私をどう思ったのか、やがて手首を握る彼の力が緩んだ。

解放されかけた手首に、ほっと安堵した瞬間　…再び手首を強く掴まれ、ぐいっと、引き寄せられた。
そして。

……。

…ん？

唇に、なま温かい感触。

「…かわいかったから、した。」

目をぱちりと開けると、目の前にあったのは、無表情でもなく、眉間にしわもなく、ただどにやりという言葉がびつたりの彼の笑顔。離れる瞬間、とどめとばかりにれるりと湿った何か唇の上を這い、だがそれはすぐに離れた。

一瞬のことで、すぐにいつもの表情にもどった彼は、机の上の日誌を手に取り呆然としている私の頭にそれを一度軽くぶつけて、あっさりと教室から出ていった。ごく自然に。

なんだろう。頭の中の情報処理能力が追い付いていない。

これは犬に咬まれたと思ったほうがよいのか、いや瀬川君だから犬じゃなくて狼か。

でも狼だったら咬まれたら痛いどころの話じゃなくて、致命傷だよ

ねえ…そんなことをのろのろと考える。

しかも、よくわからなかったが、さいごのあれはし…し…舌で舐められた…ような…気が。

ああそうか、狼って舌長そうだもんねえといまだ混乱が頭の中を駆け巡るっている。

しばらくして、触れたばかりの唇に手をあて、如月はへなへなとその場に崩れ落ちた。

「こ、腰、抜けた…」

かわいらしいヒツジの顔をして、オオカミに咬みついたのは彼女。ただオオカミはやはりオオカミだった。

はたして、ヒツジはオオカミに食べられてしまうのか、それともヒツジがオオカミを食べてしまうのが先か…それは、彼らのみが知る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5252s/>

オオカミとヒツジ

2011年4月17日22時00分発行